
輪廻の恋歌

笹川 猫ノ介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻の恋歌

【Nコード】

N7087Y

【作者名】

笹川 猫ノ介

【あらすじ】

この世に生を受けて、
6人が出会って、

恋をして、

誰かが傷ついて、

誰かが喜んで、

誰かが壊れる、

誰も傷つかない、誰も壊れない、みんなが喜べる世界までただ輪廻
転生を繰り返す小さな魂たちの物語

アメブロ「*灰色Days*」にて散らし書きした小説です。

登場人物

悠亜 ゆうあ 千影 ちかげ 町立千秋東中学1年1組 13歳
悠亜 ゆうあ 千太郎 せんたろう 国立悠亜大学付属高等学校2年B組 17歳

齊藤 さいとう 神奈町立千秋東中学1年3組 12歳
齊藤 さいとう 誠司国立悠亜大学付属高等学校1年A組 17歳

千条 せんじょう 伊吹国立悠亜大学付属高等学校2年B組 16歳

月見里 やまみり 桔梗国立悠亜大学付属高等学校1年C組 15歳

教室

「晴れた金曜日の午後3時というのは起きなければいけない、と頭ではわかっていても眠たくなってしまふものだ。しかもそれが社会の時間ならほぼ間違いない意識は夢の世界へと旅立ってしまう。どこかの国では金曜日と月曜日の車は作業員が気を抜いているからネジが緩い。だから買っな、という話がある。金曜日、一週間の疲れがたまつた作業員は明日の土日をどのように過ごすかで頭がいつぱいになり、結果ネジが緩んでしまうということだ。これはなにもその国だけに通ずるものではない。日々多忙な生活を強いられている学生と社会人も同様だ。一週間仕事、勉強、学生なら塾や予備校というオプションもついてくる。一週間の疲れがたまつた金曜日の6時間目はもっとも眠たくなる。だから、私が今社会の授業中に昼寝をしたのは仕方がないこと」

私はそこまで一息で述べると北原先生に答えを求めるように睨む。北原先生（社会教師、北原奈々。32歳独身）はチヨークを持ったまま私の目をみつめながらポカンとしている。

状況説明。

金曜日の6時間目。

12月にしては珍しく暖かい日だったので、一週間の疲れがたまっていた私はついウトウト……数分後グー。私の意識は気がついたら夢の世界へと旅立っていった。

で、それに気がついた北原先生は、数秒単位の短い話をつなぎ合わせて一つの長い夢を見ている私の頭へむかって白いチヨークを投げつけた！

チヨークは寸分の狂いもなく私の頭に当たって、軽い音を立てて割れた。北原先生はその攻撃で私が起きなかつたときようにもう一本

をチヨークを構えて私の反応を待っていた。

その攻撃は私の意識を覚醒させるには十分だったようで、すぐに私は目を覚ました。

そしたら、北原先生が『どうして寝ていたの?』と半ば怒り口調で訊ねてきたから、私は金曜日の6時間目がどれだけ眠たくなるかを北原先生に教えていた　と、いうこと。

しばらく待っても、先生はうんともすんとも何も言わない。

国語教師の前田先生なら脊髓反射で言葉を返してくるが、まったりの性格に定評のある北原先生は何も答えてくれない。

仕方なしに、私はため息をついてから言葉を出す。

「私の言いたいことは以上です。しばらく待つてみましたが、もうすぐ授業が終わるので、先生の答えを待たずに終わることにさせてもらいます。じゃあ、反論があるなら放課後に」

何を終わるんだよ、と心の中で自分の言葉に毒を吐きながら締めくくりを言う。

グルリと、教室全体に目を動かして呆気にとられる同級生の顔を見た後、最後に北原先生をキツと睨みつけた。

すると、まるでマンガのようなすばらしいタイミングで授業の終わりを告げる鐘が学校内に響き渡った。

名前は知らないが英国の、大きくて有名な時計の鐘の音らしい。鳴り終わる前に、学級委員長が音を立ててイスを立ち上がった。

それに続いてほかの生徒も立ち上がった。

「きりーっ。れーい。ちやくせーき」

学級委員長の気が抜けた号令で授業は終わった。

6時間目が終わったあとは掃除の時間。

私はどこの掃除だったっけな

黒板の横に貼り付けられた掃除当番表を見る。

私は2班だから……

げ、トイレ掃除だ。

斉藤神奈

「派手にちーちゃん怒られてたね〜」

「ん？そうかな？あんまり怖くなかったけれどね」

「え〜私は怖かったよ〜？」

中学生年相応の黄色い声をあげているのは、黒いツインテールが非常によく似合う斉藤神奈だ。

神奈は、家が近所だったこともあって、幼稚園のときからずっと一緒だ。いわゆる幼馴染。

憎たらしいほど真っ白でほそっこい体。さらにこれまた憎たらしくなるほどのクリクリお目目。

我が校は私服なので、女の子らしい白いスカートが非常によく似合っている。

女の子らしい、といった言葉をまるまる擬人化したような存在だ。

「でもさ〜ちーってすごいよね〜よくあんだけの文章をその場で思いつけるね〜」

トイレの床をこするデッキブラシを動かしたまま神奈は感嘆の声をもらす。

私は私で、水道のカビ取りをする手を休めぬまま口を開く。

ああ、水が冷たい……！

「でもさ、あれくらい即興で思いつかないとこれから先やっかいかもよ〜？」

独り言感覚の私の言葉に、ビクリと、神奈の体が反応する。

デッキブラシをこする手を止めて、少し青ざめた顔で私を見据える。そしてデッキブラシを壁に立てかけてつかつかつかと、私の元へ一直線に歩み寄る。

え？

突然の行動に、私はカビ取りの手を止めて神奈を見たまま動かなく

なった。

神奈の歩き方は、まるでこう……簡単にたとえるなら……そう、…
…たとえば、私が女王に反逆をした罪人で、神奈が、その女王で、
取り押さえられた罪人に近寄ってそのまま、絞め殺しそんな勢いで、
……ああ！もう何が言いたいかわからなくなってきた。

気がつくくと、神奈の顔がくっつきそうなくらい近くにあって、思わず私はヒイ！と叫んで後ろに少し退く。

神奈は、私のそうした反応に何も興味を示さず私の目をじっと覗き込む。

神奈の目は、ドロンとしていて、死んでる人の目みたいで、生気がやどってなくて。

声を出せずに、そのまま視線をはずさず神奈を見ていると、神奈が口を開いた。

「そんなこと言ったら私高校いけないじゃん！！！！！」

……はあ？

「はあ ……！！？！！？！！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7087y/>

輪廻の恋歌

2011年11月22日23時55分発行